

## 研究余滴：朝鮮人陶工来琉をめぐる諸課題

倉成多郎

沖縄の近世窯業史上の画期の一つとして、朝鮮人陶工・一六、一官、三官の来琉による鹿兒島・苗代川系技術の導入が挙げられる。その、朝鮮人陶工の来琉については、多くの先行研究でも取り上げられているところであるが、その来琉年については、1616年（和暦：元和2年・中国暦：万暦44年）と1617年（和暦：元和3年・中国暦：万暦45年）の二つが混在している状態が続いている。2016年、あるいは2017年は朝鮮人陶工来琉400年の節目の年を迎える。筆者が勤務する那覇市立壺屋焼物博物館では特別展を開催予定であり、沖縄県内でも近世窯業史にかかわる企画を実施する機関も少なくない。

本稿では、まず琉球側の基本文献から朝鮮人陶工来琉年と製陶開始年の特定を行う。今一度、基礎文献にたち帰り、400周年の根拠を整理しておきたい。

次に、明治以降の歴史研究の中で朝鮮人陶工来琉がどのように記述、認識されてきたかを確認していきたい。筆者の目的は、「朝鮮人陶工の近世琉球陶器に与えた影響」をめぐる、近代期の歴史認識では、それがどのようなイデオロギー的根拠の元で論じられてきたかを明らかにすることにあるが、本稿はその準備のためのものである。

### 朝鮮人陶工来琉年について

先ず、朝鮮人陶工来琉にいたる一連の過程を確認しておきたい。

1592年（文禄元年）と1597年（慶長2年）の2度にわたり豊臣秀吉は朝鮮半島において明・朝鮮との間で対外戦争を行う。多くの西南諸大名がこの戦争に動員され、島津家も出兵している。1598年（慶長3年）、秀吉の死に伴い撤退を開始した諸大名たちは多くの朝鮮人を連れ帰った。多くは労働力として連行されたが、中には朝鮮王族や儒者、さらに陶磁器生産の技術者が含まれていた。

特に陶磁器生産の技術者・陶工たちを各諸大名が自国の窯業振興のため自覚的に連行したと考えられる。彼らの関与によって成立した窯は、筑前黒田藩の高取焼（関与した半島出身陶工・高取八蔵）、筑前細川藩の上野焼（同・尊楷開）、肥前鍋島藩の有田焼（同・李参平）、松浦藩の平戸焼（同・巨関）、長門毛利藩の萩焼（同・李勺光）などである。

島津家も1598年（慶長3年）の半島からの撤退の際、全羅北道南原において多数の朝鮮人を連行し鹿兒島へ連れ帰った。中でも連行された朝鮮人陶工は3つのグループに分かれていたとされる。

- (1) 鹿兒島前之浜に着船したグループ（李・渭・川・春・金の六姓男女約20名）
- (2) 東市来神之川に上陸したグループ（申・金・慮の三姓男女約10名）
- (3) 串木野島平に着船したグループ（安・鄭・李・張・卞・朴・黄・林・車・朱・盧・羅・燕・姜・何・陳・崔・丁の十八姓男女43名）

---

くらなり・たろう：（那覇市立壺屋焼物博物館主任学芸員）

特に3番目のグループの内、安・張の二姓が琉球に派遣された。

以上は『先年朝鮮より被召渡留帳』など鹿児島側の史料文書、記録によって確認できるものであるが、本章は特に久留島浩「近世の苗代川」『薩摩・朝鮮陶工の四百年』（岩波書店）を参照にしている<sup>(i)</sup>。

それでは琉球・沖縄側の史料を見ていきたい。

朝鮮人陶工来琉に関して記述がある琉球・沖縄側の主な史料は、『新参張姓家譜』、『中山世譜』、『琉球国由来記』である。

『新参張姓家譜』とは、来琉した朝鮮人陶工・一六（張猷功）の子孫が有した家譜史料である。17世紀の後半期、士族層は首里王府の系図座に一族の履歴を提出するシステムが成立した。「家譜」と呼ばれる一族の履歴を以て士族の認定を受けるもので、沖縄本島内で約700の系統、3000冊の家譜があったとされる。朝鮮人陶工・一六の一族は、一六による陶器生産技術の導入と子孫たちによるその継承の功績から士族として遇せられるようになり『張姓家譜』を保有していた。原本は確認されていないが、戦前期に鎌倉芳太郎、比嘉朝健による調査と筆写が行われておりその内容が伝わっている。2015年、仲村顕・輝広志によって鎌倉芳太郎、比嘉朝健それぞれが筆写した『張姓家譜』の校異が行われた。本稿ではその成果を活用している<sup>(ii)</sup>。

その『張姓家譜』によれば、万曆四十四年（1616年）、尚豊王が即位前の佐敷王子であった時代、薩摩藩に滞在中に、琉球王国は「球邦未諳陶瓷」という状況であったので薩摩藩主島津家久に依頼し、帰国の際に一六、および一官、三官の朝鮮人陶工を伴って帰国した。この一六は、琉球名を仲地麗伸と改め窯業技術の指導に当たり、崇禎11年（1638年）に死去した。家譜には唐名が「張猷功」であると記され、琉球に派遣されたとされる「安・張二姓」に該当することになる。

『張姓家譜』では、一貫して尚豊王（即位前であり佐敷王子であった）とともに万曆四十四年丙辰に琉球に渡来したと記述される。

尚豊王（1590年～1640年）は、第二尚氏王統第8代国王で在位は1621年から1640年の20年に及ぶ。即位前は佐敷王子（後に中城王子）と称し、1616年（万曆44年・元和2年）に国質として鹿児島に赴くも、同年冬に摂政に就任したことを受けて帰国している。記録として確認できるのは『中山世譜』である。

『中山世譜附卷一』<sup>(iii)</sup>には、「(万曆)四十四年丙辰。為十年質事。遣尚豊公佐敷王子朝昌。到薩州。其冬任摂政。回国。」とあり、佐敷王子朝昌（後の尚豊王）は万曆44年、つまり1616年に鹿児島・薩摩藩に国質として赴いたものの、摂政就任に伴い同年冬琉球に帰国したという記録である。

さらに、『中山世譜』（蔡温本）<sup>(iv)</sup>によれば

「(万曆)四十四年丙辰。尚豊任國相。勤職五年。(後因尚寧王無嗣。入繼大統)」とある。

また同時に「(万暦)四十五年丁巳。(中略)以高麗人爲師。始造陶器。(本國治陶。自此而始)」ともある。

1713年、琉球国王・尚敬が命じて首里王府が編纂した『琉球国由来記』の「伎術門-陶工」にはおそらく、これらの記録を基として、以下のように記される<sup>(vi)</sup>。

「当国、陶始者、万暦四十四年丙辰、尚豊王、為佐敷王子時、渡御于薩州。其時、高麗人一官・老六・三官云、三人之者、御召列御帰国也。本国之于人教陶。一官・三官者、甕府ニ帰国。一六者本国滞在、為居住、結片髪、仲地名付。其子孫、于今泉崎湧田、崎山云人也。此故当国陶之器、称高麗焼也。」

以上の史料を整理するならば、3名の朝鮮人陶工が、万暦44年(1616年)の冬、佐敷王子とともに琉球に渡来し、年明けて翌年1617年に準備を整えて製陶を開始したと、少なくとも文献上は読み取ることが可能である。

#### 近代における朝鮮人陶工の語られ方

本章においては、琉球処分の激変を経た近代沖縄において、朝鮮人陶工の事績がどのように論じられていたのかをいくつかの文献から見ていきたい。

朝鮮人陶工について記述された近代期の最初期の文献としては、伊地知貞馨による1877年(明治10年)の『沖縄志』がある<sup>(vii)</sup>。伊地知は、薩摩藩の古記録を参照にしたとして、1617年(元和3年)に「始めて陶器を製す」と記述する。しかし、「始めて陶器を製す」とは、必ずしも朝鮮人陶工の渡来年を意味するものではないであろう。また、この記述は『中山世譜』(蔡温本)とも一致する記述である。

ついで1885年(明治18年)に鹽田真による「沿革伝統誌」に沖縄の陶器に関する記述があると思われる。東京上野で開かれた五品共進会に際して編術されたものであるが、筆者は原本を確認していない。ただ、1926年(昭和元年)鹽田力蔵による「琉球の焼物(上)」、出典は『書画骨董雑誌』214号、に鹽田真の「沿革伝統誌」が引用されており、その要旨を知ることができる<sup>(viii)</sup>。その引用によれば、鹽田真は朝鮮人陶工についての記述を行っていない。沖縄には元来陶器がなく、壺細工という土器の工人だけがいたが、仲村渠致元が享保8年(1723年)に陶器の製法を研究し成功させたのが琉球陶器の初めだと記述している。

次に1911年(明治44年)、北村彌一郎が沖縄視察の報告を『大日本窯業協会雑誌』(221号)に投稿した「沖縄陶業」中に一六、一官、三官についての記述を見いだすことができる<sup>(ix)</sup>。北村彌一郎は本文中で出典を明記していないが、一六、一官、三官の来琉年を元治2年(元治は元年(1864年)のみ)とするが、これはおそらく元和の誤記であろう。「琉球人原甄陶の法を知らず。(朝鮮人陶工の来琉)之を琉球に於ける製陶の揺籃と為す。」と記述している。

1923年(大正12年)に発行された真境名安興『沖縄一千年史』では、詳細な陶磁

器史の記述がみられる<sup>(ix)</sup>。

第3編第4章「風俗建築」では、「沖縄の製瓦業は支那の帰化人に依りて伝えられ」として製瓦工渡嘉敷勢頭を紹介しており、さらに第5編第3章「文化と工芸」では「天正年間尚永王の時、多少の発達を為ししやと知るべきなり」として王永澤瓦奉行就任を根拠の一つとしている。

第5編第3章「文化と工芸」で張献功についての記述がみられる。本書における記述が、ほぼ現在にまでつながる朝鮮人陶工に関する記述と重なる部分が多く、このころには朝鮮人陶工来琉に関する記述について一定のまとまりがなされていたと考えることができる。以下、引用したい。

「然るに尚寧王のとき元和三年（皇紀2277年）尚豊命を奉じて薩州に至り其高麗人張献功（一六）及び一官、三官を聘用して那覇湧田村に寓居せしめ瓷器の製法を伝授せしめたり。後一官三官は薩州に帰りしも張献功は沖縄に帰化し陶業の基礎を建てたりと云ふ。」また、かれら朝鮮人陶工たちは文禄・慶長の役で連行された朝鮮陶工たちあり、串木野の上陸しその後苗代川に移住した陶工たちの中から、3名が来琉したことも記述されている。本書では来琉年も作陶開始年も1617年（元和3年）と読むことができる記述がとられている。

1929年刊行の『世界美術全集 第21巻』鎌倉芳太郎による「琉球芸術各論」では、尚寧王29年（1617年）の朝鮮の陶工渡来以後、沖縄の陶業が「次第に隆盛に赴いた。」と記述され、来琉年を1617年とする記述が継承される<sup>(x)</sup>。

本書では、朝鮮人陶工来琉によってはじまる「朝鮮式陶窯時代」、平田典通の中国留学からの帰国と技術導入による「朝鮮式陶窯と支那式陶窯の対立時代」、そして仲村渠致元の薩摩留学と薩摩式窯業技術の導入による「朝鮮式薩摩陶法の伝来により、琉球化せる朝鮮式陶窯と琉球化せる支那式陶窯、琉球化せる朝鮮式薩摩陶法の対立時代」を迎えるという、発展史観が提示される。近世的な歴史記述の連続ではなく、科学的発展史観に基づいた近代的歴史学によって沖縄陶業史の記述を試みた初めての試みとして評価されよう。

一方、鎌倉と同時期に「張姓家譜」の筆写、研究に取り組んだ比嘉朝健は1935年（昭和10年）『陶器講座二巻』に「琉球の陶器」を発表する<sup>(xi)</sup>。本書では「始めて陶器を製作した人は、即ち朝鮮陶工の張献功であった」「其れ以前の琉球では、製陶は無かったやうに考えられる」と記述し来琉年を1616年（元和2年）とする。

1935年発行の『工業調査彙報』第12巻第4号に掲載された谷内治橋による「本邦工藝事情調査」では、沖縄の陶業開始について「（後水尾天皇の頃、薩摩から）陶工を伴い帰って此地に伝習したに創まると云われている。」と記述されるが来琉年は記述されない<sup>(xii)</sup>。同時期の『工業調査彙報』第13巻第4号に掲載された和泉正光「本邦陶磁器並に陶管工業の近況」<sup>(xiii)</sup>では朝鮮人陶工来琉年が「元治2年」（1616年）とされる。これは元和の誤記であろう。

柳宗悦が編纂した『琉球の陶器』（1941年（昭和16年）発行）<sup>(xiv)</sup>では山里永吉、比嘉景常の二人が沖縄陶業史についての論を寄せているが、山里永吉は来琉年を1616年とする一方、比嘉景常は真境名安興『沖縄一千年史』を引用して来琉年を1617年としている。

最後に、県外で発行された文献であるが眞清水蔵六が記した『泥中庵今昔陶話』（1942年発行）では琉球陶業開始年として1617年が充てられている。

#### 近代沖縄の歴史「研究史」上の課題

すでに指摘したように朝鮮人陶工の来琉は1616年（和暦：元和2年・中国暦：万暦44年）の冬として間違いないであろう。

来琉直後では製陶の準備が整わず翌1617年（和暦：元和3年・中国暦：万暦45年）から製陶が開始されたと考えることが妥当であろう。これが『中山世譜』（蔡温本）による1617年（万暦四十五年）の「以高麗人爲師。始造陶器。」という記述へとつながっていく。

近代期における沖縄窯業史研究において、朝鮮人陶工の来琉年が1616年と1617年の二つ存在するという事は、それぞれの筆者がどの文献史料にアクセスできたのかによって異ってくるものと予想することができる。特に明治大正期の伊地知貞馨・鹽田真・北村彌一郎・真境名安興のブレは彼らがどの原本にアクセスしたかによるところが大きいであろう。また、彼ら以降、沖縄の歴史研究が進み原史料の発掘と公開が進む中での記述のブレは、各著者がどのグループに所属していたかを垣間見せる証拠ともなろう。

このブレは、近代期の沖縄における歴史研究が進む中で、その研究者がアクセスすることができた資料がなにか、そしてどのようなグループの中にいたのかを見いだす手掛かりでもある。筆者は沖縄における近代期の歴史研究の史的発展と研究者たちの動向に興味を持つものであるが、今後はその学統の系譜をたどる作業を課題としたい。

#### 朝鮮人陶工と「瓦屋節」について

朝鮮人陶工来琉については「瓦屋節」といわれる沖縄の楽曲が悲恋の物語と関連されて話される場合が多い。例えば沖縄タイムスが編集した『沖縄大百科事典』瓦屋節の項は祖慶剛によって記述されるが、説明文中「この歌の背景には朝鮮人陶工優遇のため夫婦の仲を裂かれた女の悲恋物語がある。」の一文が入っている<sup>(xv)</sup>。

この悲恋の伝説とは、かつて琉球王国に窯業技術指導のために招聘された外国人を沖縄に永住させるため、その技術者が気に入った既婚女性を、無理やり離縁させてその技術者と結婚させた。その女性は無理やり引き裂かれた夫を偲び「瓦屋辻登て 真南向て見れば 島の浦ど見ゆる 里やみらぬ」という琉歌を詠んだというものである。歌の解釈はおおよそ「瓦屋辻と呼ばれる小高い丘に登って 夫が暮らす南の方角を見れば 入江や湾は見える

が「いとしい人はみることができない」とされている。また、この技術者とは中国人陶工・渡嘉敷三良、あるいは朝鮮人陶工・張献功であるといわれている。「瓦屋辻」は地名であるが、この場所がどこを指すのかでいろいろな憶測が行われ、なかでも真玉橋（現在の豊見城市）はよく言われる場所で、南側には湊が広がりその対岸に小禄村があり、彼女はもともと小禄村に住んでいたのだとされる。

この悲恋の物語は、戦前期には山里永吉の記述に登場し、その後の多くの文献で紹介され多くの人を知るところとなったが、一方、学術的にはその信ぴょう性をふくめ妥当性が得られないため論じられることが少なかった。この研究者たちの沈黙により、一方でこの悲恋の物語は否定されることなく、あたかも歴史的事実であるかのように広まっていった。本稿では、この瓦屋節について微力であるが整理を試みたい。

琉球舞踊で「瓦屋節」という場合、「押す風も 今日や心あてさらめ 雲晴れて照らす月の清らさ」を謡にした、静かな舞いを指す。歌の解釈は「今日吹く風は 私の心が分かっているかのようだ 雲を吹き飛ばしてくれて 美しい月が見える」だが、この場合の「月」は恋人の暗喩であり、見ることはできるがそばに沿うことはできないという意味でこちらも悲恋の物語を予想させる。

この女踊の本歌が「瓦屋辻登て 真南向て見れば 島の浦ど見ゆる 里やみらぬ」であるとされている。

伊波普猷の「短歌発生論としての琉球短歌釈義」（1930年（昭和5年）発表）<sup>(xvi)</sup>にこの瓦屋節が紹介されている。この文章は伊波が所持していた1795年（乾隆60年）に編纂されたと思われる『琉歌百控乾柔節流』の解釈を試みたものである。

その瓦屋節の項には「瓦屋節 首里南風之平等 鳥小堀村 美里同村瓦屋とも云」と紹介されている。「瓦屋辻」は地名であるが、『琉歌百控乾柔節流』が編纂された時点（乾隆60年、1795年）でその場所は現在の南風原町、首里鳥堀、沖縄市美里のいずれかと推定されている。つまりこの時点で瓦屋辻がどこを指すかは不明になっていたということであろう。

また、『琉歌百控乾柔節流』には瓦屋節としてもう一首紹介されている。

「瓦屋森登て 那覇湊見れば 恋し釣舟の なる清さ」

つまり、恋人の姿を探すものの、そのそばには理由があっていることができないという類型的な歌が複数存在していたということである。また、伊波はそれ以上の記述をせず悲恋の物語には一切触れていない。

つまり、現在まことしやかに言われている、中国人陶工・渡嘉敷三良、あるいは朝鮮人陶工・張献功と、無理やり離縁させられた人妻が登場する悲恋の物語と瓦屋節は関連しないとおもってさしつかえないであろう。むしろ興味をそそられるのは近代以降、中国人陶工・渡嘉敷三良、あるいは朝鮮人陶工・張献功と瓦屋節が結びついたことである。この関連が生じた契機として筆者は「瓦屋節由来記」という沖縄芝居の上演に注目しているが、その

初演の年代も含めて史資料がそろわず現在調査中である。本稿を契機に識者のご教示を得られれば幸いである。

- 
- i. 久留島弘・須田努・趙景達 編『薩摩・朝鮮陶工村の四百年』岩波書店 2014
  - ii. 仲村顕・輝広志「琉球陶瓦工家譜」『琉球陶器の来た道』沖縄県立博物館・美術館/那覇市立壺屋焼物博物館 2011
  - iii. 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重 編『琉球資料叢書 第五』井上書房 1962
  - iv. 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重 編『琉球資料叢書 第四』井上書房 1962
  - v. 外間守善・波照間永吉 編『定本 琉球国由来記』角川書店 1997
  - vi. 沖縄県立図書館複製本を利用した。
  - vii. 鹽田力蔵「琉球の焼物(上)」『書画骨董雑誌』214号 書画骨董雑誌社 1926
  - viii. 北村彌一郎「沖縄陶業」『大日本窯業協会雑誌』221号 大日本窯業協会 1911
  - ix. 真境名安興『沖縄一千年史』沖縄新民報社 1952 を参照(原本は1923(大正12)年発行)
  - x. 鎌倉芳太郎「琉球芸術各論」『世界美術全集 第21巻』平凡社 1929
  - xi. 比嘉朝健「琉球の陶器」『陶器講座二巻』雄山閣 1935
  - xii. 谷内治橘「本邦工藝事情調査」『工業調査彙報』第12巻第4号 商工省工務局 工業調査協会 1935
  - xiii. 和泉正光「本邦陶磁器並に陶管工業の近況」『工業調査彙報』第13巻第4号 商工省工務局 工業調査協会 1935
  - xiv. 柳宗悦 編『琉球の陶器』昭和書房 1942
  - xv. 沖縄大百科刊行事務局『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社 1983
  - xvi. 伊波普猷「短歌発生論としての琉球短歌釈義」『伊波普猷全集 第9巻』平凡社 1975所載

